



この教会前には大きな記念碑と石室型のキリシタン墓3基がある。記念碑には「安賀多記念 天主公教会」と記され、大正12年12月3日建立と読める。また石室型墓は粗面安山岩で作られたもので、深く穿たれた内部は一見仏像のようにも見えるが、十字が刻まれているという。波多放彩著「長防残酷物語」によれば、一時二千人近くになっていたキリシタン信者は大内氏滅亡後毛利氏によるキリシタン弾圧が開始されると、山深い僻地に逃れるしかなくなり、その多くが福栄村紫福周辺に隠れ住んだとのことである。そう言えば、萩往還沿いの明木でも信者がいたという話を聞いたが、この史料によれば、信者であった仁左衛門が寛永10年(1633)に大屋の刑場で火刑にされている。活動拠点を山口から萩に移したヴィリオン神父は、萩から津和野に赴く途中で、おそらく紫福にも立ち寄っていた可能性が高いと考えられる。彼はここ地福の原医院近くの「村市屋」を常宿としていたが、この墓はその近くにあったとのことである。

キリシタンには当初「吉利支丹」の字が当てられていたが、禁教後は「鬼理支丹」と縁起の悪い文字が使用された。将軍綱吉はキリシタンを嫌って同じ文字の「吉利支丹」を「切死丹」と書かせたという。今でこそ、山口市のサビエル記念聖堂は重要な観光資源の一つになっているし、山口市はクリスマス発祥の地山口と銘打っているが、歴史の背後には受難の時もあったことに心せねばならないだろう。(2024.2.25 記)

